

中国調査ノート7：

中国東北部の民間宗教的職能者

佐々木 伸 一

はじめに

昨年、吉林省長春市で開催された吉林省薩満文化協会が主催する第三届中国国際薩満論壇で発表をしたが¹⁾、その時のエクスカージョンで、長春から南方の伊通満族自治県で満州族シャーマンによる「表演」を見ることになった。終了後、彼らと昼食を共にする機会を得て若干の話を聞くことができた。これを1つの機縁として、本年も中国東北部を訪れることになった。

また昨年に同地で行った調査で、特定の身体感と死者の霊がシャーマンのセアンスにおいて、1つのコンテクストを作り上げている可能性に気づいたこともある。その詳細については後述するが、ただ調査時では現時点のような認識までには至っておらず、東北部で過陰の代替装置を見出すことを主な目的として、調査を実施することになった²⁾。

調査は2013年8月19日から30日までで、吉林省吉林市・黒竜江省ハルピン市・遼寧省瀋陽市で行ったが、初め瀋陽は対象としていなかった。ハルピンへ行き松花江でも水があふれているのを見て、ここでこれなら黒竜江の洪水で北の方は調査が難しいと考え、南の瀋陽に調査地を変更することにした。

第1節

この調査の結果、2つの問題を考えることになった。1つは、特定の身体感と死者霊とが形作るコンテクストの問題であり、もう1つは出会ったシャーマンからで、漢族シャーマンへの見方を変えるという可能性について、また満州

族シャーマンとはいったい何なのだろうかという疑問でもあった。

まず初めの問題であるが、特定の身体感が死者と関連しているというコンテクストが、シャーマンのセアンスにおいてあるのではないかと考えたが、それについての実証は難しい。他者の身体感をどのようにしたら把握できるのだろうか。実体のないそれを客観化することは不可能で、いわば状況証拠的な、偶然遭遇した自己の身体感に基づく経験を媒介させながらの気づきと認識の道筋を示すことで、共感的な認知をここで得たいと思う。

シャーマンのセアンスが特定のコンテクストに基づいて行われることは、ずっと以前から気づいてはいた。学生時代に宮古島でカンカカリヤーを訪ねた際、ついでにクライアントになってしまうことがよくあった。面白そうで、何となくいつの間にといった感じであったと思うが、ただその際に、彼女たちが語ってくれるその内容がよく理解できなかった。たとえば家の裏に井戸があり、それをふさいでしまったからと言われても全くぴんとこない。生活環境や日常性が違うからしょうがない、彼女たちのコンテクストに入れないのだと当時は単純に考え、まともにこの問題に取り組むことなど思いもしなかった。中国で調査を始めた頃も、今から考えれば誠に情けない話であるがそれは同じで、シャーマンの頭の中で形作られるリアリティは、理解不可能なものとなししていたが、それはシャーマン達から自分たちの見ているものについて、わかるわけがないと言われ続けたことも大きい。

中国の調査では、シャーマンのもとを訪れると大概クライアントがおり、現地での実際のセアンスを目にする機会が多かった。その後、徐々にそういう現場が少なくなってきた。そうするとセアンスを見るためには、自分か通訳をしてくれるS先生、あるいは同行してくれた運転手など、誰かがクライアントにならなければという状況に迫られた。ただ「適切」なクライアントになれるかどうかは微妙であった。単なる運勢占いや子供の夜泣き程度、また死んだ人を呼び出すようなものもそう難しくない。しかし占いをやってもらっても、これは現地での主流ではない。人々の目的の第一が病気治しだからであった。だが、皆びんびんしており病人になるのは難しい。また多くのシャーマンは「実病と

虚病」などというような使い分けをしており、実病ならここでは看ない、病院へ行けと言われてしまうからである。さらに、死んだ人を呼び出すのは、北に行くとは無くなるので使えない。加えて私が死者に関係した場合、墓の風水や、冥銭を焼いて送れと言われても、私のコンテキストとは違うので返事のしようがない。このため、「過陰」ができるという場合には、S先生の亡くなった父親を呼び出してもらい、またできないといわれる場合には、私がやむなくクライアントに化けることになったが、この「虚病」をどのように表現したらよいかかわからず、「適切」なクライアントにはなかなか出来なかった。このような方便を重ねることには心苦しいものがあり、こういった「やらせ」で何がわかるのかという疑問も感じざるを得ず、したがってそれを重視はしないが、ともかくセッションを見なければ、話だけではわからないので、とりあえず化ける、これが日常的になった。

このような事情の中で思いついたのが、広東省汕頭のホテルで私が偶然に体験したことであった。夜ベッドに入って寝入りかけたとき、背筋がゾクゾクし、絨毛立つような不快感に見舞われ、心臓はドキドキし、そのうちに目の前で火の輪が回り出し、その中に猫のような黒い顔が浮かんできた。寝てはいられなくなり、起き上がってはみたものの、この極めて不快な感覚は全く消えない。電気をつけて水や酒を飲んでも変わらない。無視して布団をかぶって寝ようとしても無理だった。結果的にエアコンのスイッチを切ったらすごい不快感は残るが一応治まり、無事に眠りにつくことになった [拙著2004、98頁]。

翌日、ホテルを替えたのは言うまでもない。その不快感の記憶は極めてリアルでなかなか消えず（今でもその残余は残っている）、また恐怖感もあり、今晚もそういう目に遭いたくなかったからである。同じ調査行で汕頭から浙江省金華へ移動したが、そのときにレストランで食事中に突然気持ちが悪くなり、食事が続けられなくなった。食わずにレストランを出てホテルへ戻ると、小1時間ほどでこの不快感は不思議なことにすっとなくなってしまった [拙著2004、109頁]。このレストランでの経験を、金華のシャーマン【56】 [拙著2004、同上] に聞いてみた。すると車に轢かれて死んだ霊の仕業だと判断された。また

2004【58】で汕頭の経験を話すと、亡くなった父の仕業になった。なぜ父が関係するのか当時は全く理解できなかった。

その後、クライアントがいる場合も多く、またそこでの様々な訴えと、それへのシャーマンごとに異なる多様な処置の仕方を見ているうちに、先の体験を使ってみることすら忘れていた。

汕頭の経験をより意識して使いだしたのは数年前からである。クライアントがいない状況が頻出するようになり、やむなくホテルでの身体感を話すと、「まともな」クライアントとして扱ってもらえたからであったが、それが「コンテキスト」であるという認識は全くなかった。セアンスが見られればよく、このやりかたはその後も続けた覚えはあるがその頻度は覚えていない。それが重要とは全く考えていなかったからである。昨年調査でも使った覚えはある。拙著2013成都【2】の事例である。シャーマンのコンテキストにうまく入れる「嘘」ではない語り、「虚病」という状況どのように作り出すか、こちらに心を奪われていたが、その後「身体感」のコンテキストというものが徐々に念頭に浮かぶようになってきた。この発想はまだ具体化には至らなかったものの、昨年度の科研申請、また本年度の慶應大学の学会発表にも取り入れた³⁾。しかしその発想はまだ大方の賛同を得るようなものではなかった。

その転機がこの10月である。科研用に茨城キリスト教大学の志賀先生から“Religious Question in Modern China”という本のメモを頂いた⁴⁾。中国では雑多な民俗宗教が並立し、それらが入り混じった形で宗教実践の場を形成する。それは場当たりのしか見えないことすらあるが、これが実は万物が相互に関係を持つ宇宙論的概念ならびにそれを具現化した「中国宗教」の「有機的なシステム」であるという考えを提示するもので、この考えが大いにヒントになった。

以前、ニューサイエンスの中で、例えば気功の「気」についてそれを物理的なエネルギーと仮定し、その科学的な解明を図る研究が行われていた⁵⁾。「気」や「感応」などを実体のあるものと想定した研究は、今なお受け継がれているが⁶⁾、有機的システムを組み上げるその「もの」は、そういった具体的な実体

ではなく、「身体性」という人間の内的な感覚自体と、ある特定の事象が結び付けられるコンテキストの共有ではないかという考えに至った。つまり死者の霊・特定の身体感というセットが人々の間にあれば、死霊や墓を思い、あるいは見るだけで特定の身体感が生じ、逆に特定の身体感が生じると死霊や墓が浮かぶ、相互の間の自動的な往還がなされる状況が形成されているのではないかと考えるようになった。そしてその身体感とは私が油頭で感じたようなものではないのだろうか。ここにおいて、特定の身体感と死者の霊がシャーマンのセアンスで、一つのコンテキストを作り上げていることを明確に意識化することができた。

この認識に基づいて今回の調査を振り返る。この調査ではいずれにおいても油頭の経験を端的な身体感化し、心臓がドキドキして背筋が寒く、毛が逆立つようなひどい不快感を昨日ホテルで体験したとして問い、セアンスをやってもらっている。調査時点では今の認識はなかったものの、第2節で記す15のシャーマン事例で1、4、12、15を除く11事例でそれは死者の霊が原因だとされ、さらにその過半数程度で（残念ながらこちらの認識状況からその数は確定できない。ただ同じパターンが何でかくもこのように繰り返されるのかという強い覚えはあった。セアンスをしてもらうこと自体に飽きてしまったほどである）、まず身内に天逝したものはいないか → いない → それでは他人の死鬼（外鬼）である、という同一のパターンが見られたのである。しかも吉林・ハルピン・瀋陽のいずれにもそれはあった。これからすれば死者の霊・特定の身体感というコンテキストの存在を意図しない中でのやらせでしかなかったものが、結果的にコンテキストの存在を証明してしまったのである。また2004【58】の事例の件も、この認識からうなずけるのである。当時はまだシャーマンのセアンスについての経験値が低く、とりあえずシャーマンのいうことに乗るという態度しか取れず、身内といわれた時に最近亡くなった者が父しかいなかったのそういう返事をする事になったからである。たぶん身内にいないと応えれば「外鬼」になっていた可能性は高い。

なお、第2節事例【3】での吐き気があるなら「内鬼」であるという判断や、

どの事例だったかよく覚えていないが、本当に心臓がどきどきするのかと、何度も繰り返して質問された。この確認は2件位で求められた記憶がある。現段階ではわからないものの、ここで述べる身体感のコンテクストには、より微妙な幾つかの種類があるのではないだろうか。

こういうコンテクストがあるならば、中国の多くの人々がなぜか無性に墓を怖がるか理由がわかる。また初めての大陸での調査の頃、上海の火葬場へついて来てくれた中国人の先生が、その後に行ったレストランで、我々が火葬場で拾った喪章やそこで買った位牌を見せ合っていると、なぜか気持ちが悪くなりご飯が食べられなくなってしまったことや、長沙の博物館の宗教研究者に近くのシャーマンの家に案内してもらったところ [拙著2002【26】]、こういったところに来ると気持ちが悪くなってしまおうと言い、そそくさと帰ってしまったことを思い出す。どちらもまともな研究者であり、これらには今でも忘れられない強い印象がある。私からしたらなぜそうなるのか全くわからなかったが、このコンテクストを实在のものとするれば十分に理解できよう。また後者の例では「迷信」と身体感というような他のコンテクストも想定されるのではないだろうか。ここからの可能性として、気功や風水、また天人合一、感応など、中国思想を支える根幹の実態に幾分近づけるのではないかと考えている。

さて、今回の調査でもう一つ考えなければならなくなったことがある。いわゆる漢族のシャーマンを本当に一体的に捉えてよいかという点である。漢族だという人たちをこれまで調査対象としてきたのだから、もちろん中国でのシャーマンの現状を語るにはそれでよいのかもしれない。しかしその来歴を、どのような事情を経て今のようなものになったかという点加わると、話は極めて難しくなる。これまでの調査においても、たとえば河北省趙県で「明眼」と称するシャーマンに会った [拙著2002【13】]。

彼女によれば母も同じシャーマンであり「還郷道」の信者であったと言う。還郷道とは当時の道教の新しい一派の職階名である [拙著2002注10]。道教儀礼の中で附身して語ることがその役割で、シャーマンに変わりがないが、果たして他のローカルなシャーマンと同じ位置づけでよいのだろうか。以前からこ

ういう点が気がかりだったが、それを追求し始めると私にとって全く手に余るものになる可能性が大きく、敢えて無視していた。

しかし、この調査で満州族のシャーマンに接したことで、否が応でもまた考えざるを得なくなってしまう。今後それに取り組むかどうかは別として、ここでは問題点のみを指摘しておきたい。

それは漢族シャーマンとされている現状の一部が、満州族シャーマンあるいは他の北方シャーマニズムの系譜につながるのではないかという問題である。今回の調査でまず「跳大神」という言葉を考えるようになった。満州族でも漢族でも、シャーマンは跳大神と見なされるのがどうも一般的なようなのである。これまで跳大神とは漢族のシャーマンを迷信扱する言葉としか捉えていなかったが、跳大神とは下記の楊の述べる満州語 cama（察瑪）に由来するのではないかと思われるのである⁷⁾。満州族のシャーマンは普通「薩滿」と表記されるが、これは単に音を漢字に当てはめたものであり、その実態を表す言葉が「跳大神」なのではないだろうか。もしそうであるなら、ツングース系シャーマンの系譜と漢族のそれは、何らかの関係の中でつながっているのではなからうか。

さらに、楊紅2012によれば、漢軍八旗由来の満州族シャーマンが吉林市烏拉街鎮の村にいるという。「彼らはもともと漢族であったが、清朝の八旗制度に編入されたため、現在でも「満州族」として登録している」⁸⁾、また「シャーマンは、「大神」と「二神」に分かれている。二神はシャーマンの助手である」⁹⁾。この人たちをどのように考えればいいのだろう。楊はこの点について何も述べてはいないが、次節に書いた【7】ハルピン・【11】瀋陽の事例などで、漢族でも大神・二神の2名でセアンスを行うと聞いた。大神が腰鈴をつけて神がかりをし、二神は太鼓を叩いて大神を附身させ、介添えや通訳などの役割を果たすという。またハルピンで道教を勉強している若い男性からも同じような話や、満族も漢族もシャーマンはやっていることは同じだと聞いた¹⁰⁾。

吉林市烏拉街鎮で今回会った満州族シャーマンは、初めに述べたように昨年の招待講演で接する機会を得た人たちである。吉林省薩滿文化協会の主催による「表演」で、それは満州族の「まともな」シャーマンであるという認識だっ

たが、楊はその人たちを取り挙げていない。たまたま出会わなかったからとも思われるが、ただ満州族の氏族の「純粹なシャーマン」という議論の立て方では、漢軍八旗の事例や、我々が接触した満州族シャーマンの「壇」（シャーマン組織）、それは血縁関係のない雑姓壇で、しかも漢族の者もそこに含まれる、こういった人たちをうまく扱えないことは明らかである。もちろん漢族シャーマンという設定も難しくなる。断片的な資料からの推測に過ぎないが、民族とは何かという問題と関連するこの議論は、中華文明圏の複雑な紆余曲折した長い歴史を俯瞰し、岡田のような語りを知ってしまうと¹¹⁾、「漢民族」とは一体どのような人々なのか疑念があらためて生じる。

漢族は結果として出来上がった、その時点での人々の集団概念といった発想でいいのかもしれない。その生成については、例えば劉正愛が満州族について述べるような1つの研究領域を形作るが¹²⁾、原型を求めるのではなく、そのプロセスで何が生まれ、何が残されたかという程度の発想で十分な気もする。

楊の論は、満州族シャーマンが氏族のなかで継承され、氏族の必須の構成要素とするそれは、ロシアの研究者（彼らの調査自体への疑いも出ているのだがそれは別として）が昔作り上げた北方シャーマニズム的モデルに基づくものであるが、漢族のシャーマンでそのような形の研究が果たして可能であろうか。たとえば中村が唐から宋代のシャーマンについての研究を行っているが¹³⁾、先の岡田の論では、唐代の人々とは、中国北部での北方系の遊牧・狩猟していた人々の移住を視野に入れており、それを漢族シャーマンと同定してよいかは難しい問題となる。もちろん中村は中国シャーマニズムとして漢族とは規定はしていないが、様々な人々が混じり合った状況が中国であり、楊のような形の研究は無理なのではないかと思っている。

ただそうは言うものの、これまでの調査研究で確認した中国南北の大きな差がなぜ生じたのか知りたいという誘惑は捨てがたい [拙著2013]。その1つは「過陰」・「閔亡」という死者の口寄せ儀礼が長江から北では、ほぼ見られないことである。もう1つは南北の文化境界とされる淮河から北では、神は全て動物神になることであるが、差の生成を考えるにはそれぞれが誰の文化なのかと

いう、楊のような問題の立て方が必要になってくる。今回の調査でも、動物神を「草神」、いわゆる天帝以下の神々を「上房神」とする事例を2件見出した。今、確かに漢族と動物神は北方では結びついており、人々はそれを普通のこととしている。北京四大門や天津五大門という言い方で、キツネを「胡仙」とするなど動物神が「仙」とされシャーマンの附身神となるが、儒・仏・道の三教が交わる中華文明という中でなぜという違和感がある。それは南方では動物霊は大体が「邪氣」扱いされているからである。なおこの件に関して、中国史の中で、金と南宋という淮河を境とする2つの国家の構図は示唆的であるが、ここではこの問題をこの程度の話にしておかなければならないだろう。

なお、今回の調査で家に付いている仙という事例が3件あった。嫁がそれを受け継ぐというが、こういったことは時たまこれまでも見受けられた。このことに関しては、今後機会があれば検討してみたい。

第2節

さて、ここからは中国ノートシリーズの形で、これまでと同様に、調査の状況とそこから得られた情報を以下で書き記す。

8月19日（月）関空から上海浦東定刻着。18時発で長春へ、空港バスでホテルへ22時半着、昔の満鉄系の旧大和ホテルであった。8月20日（火）9時半過ぎに旧満州国政府の建物が公園化されているのを見に行くが、入場料が80元と高く入らずに戻る。12時前にチェックアウトし長春北駅へ。14時5分の高鉄に乗る。40分ほどで吉林へ着く。ホテルへ荷物を置きタクシーで江密峰鎮へ行く。

車で運転手から聞く。薩満は満族で、仙家は漢族と区別がある。病院で治らない病氣も治る。信じようが信じまいが行かざるを得ない。迷信というけれど、なぜ多くの人が寺廟に行くのか。自分の村に仙の人がいてよく当たったが、密告されて仏像を取り上げられ、今はやっていない。たぶん誰かの恨みを買ったのだろう。

ある日、夜中に帰って寝ていたら口が勝手にしゃべりだした。仙家に行ってもらったらそれは「魘」だとされた。夢は断片的だが、全部覚えている

から「魘」なのだ。こういう体験をしたことがあるが、不思議なことがあるものだ。

仙を祀っていた人も仏像を祀るようになり、仙家と仏家の区別がだんだんつなくなってきた。仙家を頼むと、たいていはキツネ「胡仙」である。

鎮を見て回り、聞いてみるとシャーマン名称は仙家で通じる。依頼することを「求仙」「問事」という。18時過ぎに帰着。外でご飯。夜に満族シャーマンのTさんへ電話。

8月21日（水）9時半に出かける。お土産を買ってタクシーで烏拉街満族鎮へ。10時45分着。Tさんが出迎えに来る。市場の2階で靴屋をやっている。しばらく話を聞く。Cさんも加わる。12時に皆で食事をする。満族のしゃぶしゃぶ鍋で、だれもアルコールは飲まない。ご飯の途中で、Tさんが半分くらいの神がかり状態になり生肉を食べる。14時まで。

C、男性、大尉将軍・オオカミ

2003年からやっている。その前は病気であった。現在、掌壇人（儀礼を統括）をしている。2008焼太平香をする。風水師を兼ねている。

T、女性、先鋒鷹神・タカ

27歳から病気で、神のために尽くさなければ治らないと言われ、やるようになった。「看外科」である。36歳で一人前となる。そのとき「擡神」儀礼をした。「烏雲」というものについては全く知らない（後から電話で聞く）。

シャーマンのグループを～壇という。常張氏壇、常という人が最初に始めた。常氏から張氏まで6代、その間のことは不明である。彼らの師傳が張という男性で、今90歳でまだ健在である。壇は現在8名、雑姓壇である。一族だけでやっているのを同姓壇という。家族で伝承している。ここには張氏壇というのがある。シャーマンは家系で継承され、一族の中で必ず1人はなる者がいる。

シャーマンは基本的には病気が続き、それが「神前効力」神のために力を尽くすべきである、と判断され、弟子入りをする。弟子入りには、掌壇人がまずシャーマンに向いているかどうかを判断し、入門儀礼をする。壇の全員が参加

して神の許可をもらう。神に拒否される場合もある。Cの伯父が前掌壇人でCが一番弟子、Tが二番弟子、Sが三番弟子（食事に後から夫婦でやってきた、鎌で腕を切る芸ができるという）、前掌壇人の甥がイノシシである（昨年の表演での附身神）。召命型である。神授師伝で、トレーニングではできない。神がかったとき意識は基本的にはない。空白の状態である。

儀礼は、家族、一族の祖先祭祀、焼太平香（安泰祈願？）などで、全員でやる場合から1人までとさまざまで状況による。壇では、年に1回大晦日から正月にかけて、家の高いところにおいてある御神体（紙に書いた宣紙（和紙）・名称は聞けなかった）の箱を開ける。龍の寅年に「亮符」といって開ける場合もある。

漢人のシャーマン跳大神は神を家の中に呼ぶやり方をしており、霊を呼んで祀り上げておとなしくさせる。満族のシャーマンはこれとは違う。霊を外に追い出すものである。死んだ人を呼ぶことはないが、死んだ人が災いをなすことがあるので、それを祓う。

常張氏の最高神は老祖師である。ある子供が長白山に入って、虎と一緒に30数年間暮らし、力を身に付けてシャーマンとなった。今の神として、ヘビ、馬、クマ、この3神は呼べない。イノシシ「太歳」、鷹「先鋒鷹神」、オオカミ、金火花神、童子拜関爺、心痛王子、豊都鬼神、鋼刀王子などの神を呼ぶ。

Cは農業、Tは靴屋をやっており、専業では食べていけないという。現在、地方政府で構想されている長白山での表演で稼げるのではという期待をかけている。

焼太平香をやってくれないかこちらから持ちかけると渋られる。値段をこっそり聞いてもらうと3千円だという。高価でありこれをどう解釈するかでいろいろ考えるが、もったいないからやめる。

鎮を少し見て回る。その運転手が、常張氏壇は跳大神だという。昼食を一緒にした4人のうち2人は漢族だという。彼によれば、漢族と満族のシャーマンは違う、2か月前に漢族のそれを見た。夕刻から1時間ほどであった。何人かでやっており、神がかった人は大神で、鉦をたたく人が二神である。バスで帰

る。帰着16時。今日の整理。

8月22日（木）9時10分に出かける。バスで栄吉県へ。客を集めながら走るので市街を出るまでに30分以上、10時半ごろ着く。2台の三輪モーターに聞く。どちらからも勧められたのが、ただ何もしないで話すだけのシャーマンであった。三輪モーターで1軒目、バス駅から近くの団地の3階、儀礼は極めて簡単で10分で全部おしまいとなる。

【1】女性、58歳、仙家、老白太太

仙を祀っている。胡仙。モンゴル族である。モンゴルとの境の白城市の出身で、昔は屑ひろいをしていた。病気を患ってから仙になり治った。

ホテルの部屋での不快感の原因は魂が抜けていたからである。生魂、幽魂といい、落ちる可能性がある。それを衣服で拾って、家の外でそれを着れば魂は入る。

死んだ人は呼ばない。それは人を騙すものである。本来は、夫の家の姓、Rを名乗るはずだが、こういうことをやっているの、それが有名になって老白太太と呼ばれている。

歩いて駅へ戻る途中、病院で客待ちの白タクに聞く。近くにいるというので行ってみると周易算命なのでパスする。クライアントが3組いた。仙家も仏家もあるがクライアントにとってその差はよくわからないそうである。

白タクからもう1軒あると聞いていたので携帯で呼び出すと、ちょっと先に止まっていた。栄吉県K村でさほど遠くない。庭の花がきれいである。

【2】K、女性、69歳、仙家

行くと豆をむいていた。生まれて3か月で母親が亡くなり、祖母に育てられた。12歳の時から仏を信じていた。50歳になって「安坐」をした。その前は病気があった。吉林の北山の寺に帰依している。仏家である。息子は交通警察隊の隊長をやっている。

多数の仏像が祭壇に飾ってある。どこかへ行ったら自分で買って帰って祀る。自分は仙ではないという。

儀礼をやってもらう。名前、年齢、誕生日を聞く。指で数を数えてから、身



写真1 事例2の祭壇

内にこんな人、背の低い人で、横死した人はいませんか。友人で死んだ人はいませんかと尋ねられる。いないというと、何かの悪霊に取り憑かれている。でも送送をすればよい。暗くなってから、線香を3本立てて、「家から、はい、出ていきなさい」と言いながら外に行けばよい。名前、生年月日を紙に書かせる。ここで3日間拜んであげるから、そ

うすればよくなる。線香を1本取り、私の頭の周りをめぐらせ、次に黄紙で同じようにし、その紙をお皿の真ん中に中が多分空洞の棒状のものが付いている。この棒の先に黄紙を置いて燃やす。皿には水が入っており、棒の下の1カ所から小さな泡が出てくる。その泡がどこから出てくるかで悪霊のいる方向を判断する。それによれば南に、また北にもあるという。

死んだ人を呼ぶことはしない。自分はしない。仙家だから。でも今は跳大神が増えている。政府の取り締まりが緩くなったからである。死んだ人を呼ぶのは人騙しである。やるのは跳大神でたくさんはいない。「バッキー」という(漢字は不明)。

百元札が何枚か机の上に置いてあった。いくら支払えばいいかと尋ねると、遠くから来たのでお金は要らないといわれる。

県城に戻り12時過ぎなのでご飯。辛そうだがさほどでもない。13時20分のバスで西陽鎮へ。そこの白タクが行きたがらないので、次の鎮、双河鎮へ。14時40分くらい。70歳以上の男性で仙家の人がいると聞かすが、電話してもらおうと不在。そこでKという場所の女性のところへ三輪車で行く。

【3】女性、52歳、仙家

小学校は6年、中学は半年で辞めた。始めて何年もたっていない。仙家で胡黄氏家（イタチ）である。大きな炕（オンドル）がある部屋に観音と布袋が祀ってある。炕の上に胡坐をかいて座り、親指で掌の中心を押し、薬指の第二関節をつまんで判断する。医者ならば脈をとるがこれでわかるという。これを行っているときには仙が附身している。仙から言葉で教えてもらうのではなく、仙が直接話している。外鬼（野鬼）が崇めている。内鬼なら吐き気の状態がある。邪気病はこのあたりでは外路病という。病院に行くのは実病という。死んだ人は呼ばない。

鎮で聞く。四大門がある、それはヘビ、イタチ、キツネ、蟒（大蛇）である。

鎮に戻ると13時40分でバスは最終が出た後と聞く。いくらなんでも早すぎる。鎮へ入っていく道路の分岐点までそのまま送ってもらい、そこで吉林行のバスを待つが、栄吉の県城に行く鉄道関係者の車に乗せてもらえることになる。有難いことに乗ってすぐに先が見えないほどの豪雨に見舞われる。栄吉でバスに乗り換え吉林へ。17時40分ホテル着。外で食事、ついでに駅でハルピンへの切符を買う。帰って情報の整理。

8月23日（金）ホテルをチェックアウトし10時58分吉林発の高鉄でハルピンへ。13時前に着く。タクシーでホテルへ。駅の向かい側の旧大和ホテルであった。なぜかこの調査では満鉄の旧大和ホテルにご縁がある。地図を買い求めに行くが本屋など見つからずかなりうろうろし、買ってから今度はタクシーがつかまらず、結局16時前。もうどこへも行ける時間ではないので、あきらめて近くの省立博物館へ、だがつまらない。宿へ戻ってお茶、外で食事。

8月24日（土）9時20分に出かける。ハルピン東駅まで6番のバスで1時間、そこから賓県行バス、高速を使い45分、県城へ。三輪車で1軒目そう遠くないところであった。30分ほど話を聞く。

◎男性、U、25歳、正一道、道家、あるいは道士見習い

彼女がクライアントかわからないが若い女性がいた。我々が訪ねると、また後でという風に出ていく。

学校は中学2年まで、子供のころから道縁があって、17歳の時に道教に入る決心をした。特別なきっかけになることはなかった。武当山で3年修行をした。今は人助けで、運勢を看ること、外科（病気治し）をやっている。上海の城皇廟では道長にも会ったことがある。

賓県では道教は発達していない。道家としてやっている人はほとんどいない。したがって道教系の葬式は行われていない。葬式にかかわるのは陰陽（風水師）である。仏家はたくさんいるし、跳大神も多い。友達に跳大神をやっている者が何人もいる。

人が死んだら、最後に一つ「呼」という気が残る。呼は一定の時刻に死者から出る。出てからしばらくさ迷う。その呼の八字と合わない八字を持つ者は、葬式にはかかわってはいけない。そのためまず陰陽が死者の八字を判断する。もしそのことを知らずに葬式に来ると、軽い場合でも病気になり、ひどい場合は死に至る。

死者を呼ぶという儀礼は道家ではないが、仙家では、「仙」以外に、自分の身内の死者を呼ぶことがある。自分に附身させ、災いの原因を尋ねることになる。その場合は、クライアントの身内の死者の霊が原因である。

漢族と満族のシャーマンは全く同じである。神も、霊も、道具も同じである。やっていることに変わりはない。跳大神は、大神と二神でやる。大神が附身する。大神は「坐櫓」である。神がかると椅子に座ってやるからである。二神は「站櫓」という。立ってやるからである。二神は采配と介添え役である「大神坐櫓跳神、二神站櫓呼号」。

跳大神にはいろいろな仙がある。胡キツネ、黄イタチ（この2つが多い）、白ハリネズミ、柳ヘビ、灰ネズミ。これらが一般的で、他にはオオカミ、蟒などがある。シャーマンは、文堂と武堂に分かれる。文堂の場合は普通の穏やかな語りになる。一方、武堂は激しい動作を伴う。

火のついた線香を食べるパフォーマンスをしてくれる。満族ではいろいろな針を刺すとか線香の火を飲み込むというパフォーマンスがあるが、漢族にもあるのでやってあげようということで、見ることになる。附身すると手が冷た

くなり、背中は熱くなる。自分の手を握らせて、冷たいだろうという。そうすると彼は附身状態になったということになる。

終わってからしばらくの間、線香を吐き出し続けていた。

街中へ歩いて戻っていくと先の女性運転手の三輪車に出会う。彼女の車で2軒目へ行く。

【4】女性、57歳、隣の人は大仙だという。

45歳の時に始まる。仙でも神でもない。仏教を信じている。最初、冗談で外科の病気があるよと言ってやってあげたら、それが噂になって人が訪ねてくるようになった。もともと農民で、結婚して県城に住むようになった。子供はいない。自分はこれで生活しているわけではないので、クライアントにお金をあげる場合もある。人の役に立てばよい。依頼者がおり、朴克牌（トランプ）を使っていた。

歩いて戻り昼ごはんにする。13時半で少し見て回る。もう1軒行こうとしているときに先ほどの三輪車をまた見つけ、街の外へ行く。

【5】女性、仙家

家に祭壇が作ってある。これになる前は病気気味であったが、なってからはすっかり元気になった。依頼者が来ると元気になる。

看てもらおう。私はかかるのが早いからねと言い、ググッと喉を鳴らすともう仙が降りてきた。紙牌（中国式トランプ）を切らせ、1枚抜き出させる。それを並べ、年齢、名前、八字を聞く。右手の脈をとり、身内に横死者はいないかと聞く。ないと答えると、それは外鬼であるという。五鬼（5人の死者）がついているという。本当に祓うには家と廟でいろいろやらなければならないがここでできるという。祓う儀礼をここでやるかと聞かれ、660元かかると言われ、やめてバス站へ戻る。

14時40分、少し早いバスで帰る。17時20分帰着。情報の整理をしてから外でご飯。

8月25日（日）9時20分タクシーで呼蘭区へ。松花江は大増水し河川敷は全部水に浸かっている。10時半に着く。三輪モーターで県城のはずれ、1軒目は

留守、戻ろうかと言っていると近くに別な人がいるというので2軒目。仙家も跳大神はできる。神がかりになって腰鈴をつけて踊るのがそれである、と運転手は言う。

【6】女性、60歳過ぎ、大仙、

息子が2人いる。1人は税務局、もう1人は弁護士である。彼らが試験を受けるときに、夢で神がこのままではだめだ、受からない、地蔵経を与えなさいといわれた。そうしたら両方が合格した。10数年前からやっている。修行の結果である。容易にできるものではない。洪水が起きているが、これも前もって夢で見た（偉そうに語る）。この間、普陀山、上海にも行って遊んできた。念仏を毎日している。附身神はキツネ「大仙」である。壁の赤い布は「家堂」である。

儀礼をやってもら。線香をつけたあと100元を求められる（以前はこんなに高くなかった）。机の上には100元札が7枚くらい置いてある。椅子に座りあくびを、なかなかかかからない。我々がよそ者なので警戒されている。その時、次の客が来る。男1人、女2人の彼女と顔見知りの3人組である。さらに雑談を続け、やっとかかる。名前、生年月日時を聞く。白酒を掌に垂らし、左手の手首を握り、脈を診る。この人は心臓に問題がある。これは「実病」である。もう一度白酒を垂らし今度は右手首を握る。実病の外に「外科病」もある。実病は病院に行って診てもらった方がいい。外科病の方は野鬼に侵されているから送送しなければならない。黄紙2束、酒2本、背中に十字を3回書くようにしてから十字路へ。それが近くにはないときは、十字を道に書いて、そこで黄紙を燃やす。灰に酒をふりかけ、振り返らないで帰る。本人がやってはだめ。片足を両手で持ち上げる動作を毎晩に3回ずつやりなさいと言われる（これは何のためかわからない）。やっている間に、30代くらいの女がやってくる。もういいだろうという感じで追い立てられるように帰ることになる。かかった状態のまま、次を見るようである。

さらなるインタビューはできず、県城に戻りバスで楽業鎮へ行こうとするがバスに乗ると指定の座席がない。立ち席のようでキャンセルしようとするが職

員は応じない。S先生がここで頑張って金を取り戻しタクシーで行く。小さな鎮であり、13時半過ぎなので昼ごはんにはしたが、もう大半の店は閉まっている。

車3台に聞くがこの辺りにはいないという。南の方に行かなければならないといわれる。蘭西に行くことにしバスを待つ。今度も立ち席、明らかな違反だがこのあたりではこれが当たり前のようである。15時前着。三輪モーターで1軒目。周易算命の人で午後はやらないと留守番の人に言われる。名刺をもらう。算命がもう市民権を得たようである。

鎮に戻り聞きまわるがよい返事はない。そこへ白タクの運転手が声をかけてくる。彼としては単なる客のはずだったが、偶然にも彼の妻が大仙であり行くことにする。いるかどうか電話する。

【7】R、女性、45歳、大仙

3年前から始めた（もっと最近かもしれない。習熟度が低い）。この村の生まれで、農業をやっている。2番目の子供を産んでから病気になった。「風湿病」痛風で炕から降りることすらできなかった。これが10数年前である。仙のところへ行くと、こういう仕事をするようにしろと言われ、仙を祀って拜んでいたら体がよくなった。病気の時は家事もできないので夫は大変だった。今はちゃんと歩け、家事もできるし、経済的にも良くなった。上の子供は娘で結婚、

下は息子で自動車の修理を習っている。

儀礼をやってもらう。撮影。腰掛に座って、今日、この家に来た以上は、通天教主を呼んで見てあげる。かかり始める。夫に水を持ってきてもらう。かかってから少し飲む。歳は、名前は、生年月日時は、と聞いてくる。野鬼が付いて



写真2 事例7の祭壇

いる。体のがっちりした人で、交通事故で死んだ。酒とたばこが欲しいからついてきたのだ。「解決」には、黄紙、酒、たばこが必要である。黄紙を持ってクライアントの私のまわりを、右から3回、左から3回まわる。家を出て十字路に丸を書いて、その中に×を書く。丸を書かないと他の野鬼が奪いに來るからで、丸を書いておけば奪えない。その中で黄紙とたばこを燃やし、それに酒をかける。これで送送ができる。

祭壇、赤い紙が草仙、黄色の紙が上房仙（通天教主）、仏像（単なる飾りである）、仙の人から安坐してもらった。大神と二神がいる。跳大神の場合には、大神が神がかり、二神は喊号する（状況を伝える）。神の言葉を解釈し説明する。二神が太鼓を叩いていると神がかり状態になる。二神を呼んで儀礼をやる。クライアントの金銭的負担が大きくなるので、普段はやらない。二神は男女どちらでもよい。

16時20分バス站へ。終バスであった。18時市内着。松花江の橋のところである。タクシーに乗り18時20分ホテルへ。ホテルでご飯。瀋陽の切符を買いに駅へ行き、帰ってから情報の整理。

8月26日（月）9時20分文廟へ行く。受験用のお札の一種を売っており、その値段が100元には驚く。宿へ戻りチェックアウトしハルビン西駅へ。大連観光を誘う若い女性が何人もいる。11時42分の高鉄で瀋陽へ。お弁当を買って食べる25元。14時着、タクシーでホテルへ。両替に行き、帰りの航空券を銀行の近くで買う。さらに新華書店で地図を買う。すでに16時20分、そのまま宿へ歩いて帰る。50分ほどかかる。近くの広達モールを見学。このほかイケアの大きな店などが傍にある。18時半モールの3階でご飯。

8月27日（火）9時20分タクシーで蘇家屯街道へ。30分ほどかかるが、いないというのでさらにタクシーで八一街道へ、ここら辺でもないといわれる。1台の三輪モーターだけが遼陽市の40分ほどかかるところにいるといわれる。これはやめてバスで紅菱街道へ。三輪モーターで1軒目。E村。

【8】P、女性、50代、大仙

子供のころからこういったことに縁があった。自分は癩病になって1年以上

も大変な状態だった¹⁴⁾。この仙は夫の家に代々伝わっている仙である。E家（夫の姓）はEM府と呼ばれている。この家に嫁に来て仙を受け継いだ。観音を信じている。普陀山へも行った。そこで観音像を買い求め開光点眼もしてもらった。子供は息子がいるがもう結婚している。S屯で家を買って暮らしている。8年間勉強をした（中学校位であろう）。靴屋で働いていたが、病気になったので首にされた。

儀礼をやってもらう。外鬼（野鬼）なので、自分で送迎した方がよい。ホテルなのでやりにくいというと、それではと仙水をプラスチックの笹の葉で、クライアントの私に振り掛けた。

政府の幹部もやりに来る。大幹部もこれを信じている。毛沢東は信じていたが、人には許さなかったという。胡仙である。鎮へ戻り電動三輪で2軒目へ行く。

【9】女性、大仙

病気でこういうものになった。自分は、もともとは南の仙であり、北に来て誰も知り合いがおらず苦勞した。南の人と同じ「水土」で生きていた者だから、南の人を守ることができる（我々が上海から来たと言うところ説明した）。自分がこの道に入ったのは毛沢東の導きであるので像を祀っている。

死んだ人と呼ぶことは南の仙だからできる（このようなシャーマンの自己認識は初めてである）。

見てもらう。特別な憑依状態は示さず附身状態となり、一人称で仙として語る。質問には歌って答える。歌のメロディーは文革のときのものであった。

身内に誰か不幸がありましたかと聞き、ないと答えると、外鬼・野鬼が付いているという。邪気祓いをしてあげる、私が守ってあげるから大丈夫という。

鎮へ戻り銀河飯店という立派な店で昼ごはん。13時50分のバスで燈塔市へ。かなり大きな町である。裏通りを抜け聞いてみようとするが三輪モーターはいない。2年前に禁止されたという。やむなくタクシーを呼び止め3台目であるといわれるが、どういう訳か仏具屋へ連れて行かれる。しかも留守であった。そこでまたタクシーを呼び止め聞くと1台目は知らない。2台目がたまたま知っ

ており30元で行くという。その人は自分の母の実家の村の出身で、母とは親戚であるという。このあたりでは胡仙が一番多い。黄（イタチ）はあまりないそうである。

【10】目の不自由な女性、73歳、大仙

目は子供のころから見えない。看てもらう。クライアントの私に線香を立てさせる。まずは調べてあげる。ただ線香が半分くらいになるまで、しばらく燃やしておかなければならない。その段階で尋ねられる。年齢は、生年月日時は、結果として四鬼が付いているという。こちらで何とかしてあげるから大丈夫ですと、何回も繰り返して強調する。

バス站へ戻り15時50分発で瀋陽へ戻る。どこで降りるか場所がわからず、だいたい手前で降りてしまいタクシーでホテルへ、18時着。モールでご飯。辛い魚料理だったがおいしかった。帰って情報の整理。

8月28日（水）雨である。9時20分にタクシーで瀋北新区へ。10時過ぎ着。三輪モーターで区のはずれへ。

【11】F、女性、60歳、大仙、胡仙

行くと隣の部屋にジャン卓が3台ありマージャンをやっている。雀荘状態であった。本人は不在だったが連絡してもらおうとすぐに帰ってきた。

農民である。J家。この家に嫁に来て、家の姑の姑が仙であった。結婚後しばらくすると体調が悪くなった。それが10数年続き、それを継いでやることにしたら病気は治った。

ここらへんには、胡・黄・白・長・蟒の5仙がある。白はウサギである。跳大神と二神とでやる。自分は大神で、二神は同じ村の女性で、瘧病がありクライアントとして来ていた人である。大神が神がかかる。さまざまな神がやってくる。二神は、昔は太鼓を使っていた。大神は腰鈴をつけていた。これらは文革のときに取り上げられて、それ以後使わなくなった。このような跳大神は重大な場合のみに行う。死んだ人は呼ばない。死者の要望は仙が教えてくれる。公安の取り締まりは、今はほとんどない。

看てもらうが死者が関係しているといわれたが符を書いてくれるだけであっ

た。符を朱で書きこれを部屋で燃やせばよいという。

三輪モーターが迎えに来るまで雑談で過ごす。なかなか来ない。11時半、区に戻り市場など少し見学。大きな柞蚕のさなぎを売っている。食用である。雨降りので寒いので服を買う。12時半過ぎお昼ご飯。食事後、何台もの三輪やタクシーに尋ねても知らない、いい加減嫌になりそうな時、タクシーがいるという。行くことにする。

【12】女性、80歳、大仙、蟒、仙堂の真ん中に祀ってある



写真3 事例12の祭壇

結婚して12年目に病気になり、55歳で仙になった。25年間やっている。C家に代々伝わる仙であり、嫁に入っただけで、それで継いだ。次は嫁に来るはずだという。息子は1人、娘は7人。このへんでは、胡・黄・白・長・蟒での5仙である。

大きな仙堂で白・蟒・三大胡爺の3仙を祀っている。三大胡爺は三大爺といい地方神であるようで、七星山にその廟があるという。

儀礼をやってもらう。線香を立てて拝む。座って膝をそろえ、指を組むような形で附身。たばこを吸いながら、クライアントである私の左手の脈をとり、たばこの煙を3回吹きかける。右手も同様にする。家に祀られていない仏像がないかと聞く。無いというと探さなさいと言われる。有るといって、あなたには仏縁がないから「送」してください、寺に持っていけばいいと言われる。あと何かないかと聞かれる。宿の話をする。それは蛇が付いているので符で送しろといわれる。北西に百歩行ったところで線香9本を立て、夜の12時に符を燃やし、その灰の1つをベッドの頭の方へ、もう1つを足元に置く。朱砂で符を書き、碗に水を入れ、朱砂を少し混ぜて私に飲ませる。また、何か破財があ

るかと言われる。無いというと財運が良くないといわれる。運転手もそこで、頭がかかかとするのでやってもらう。それが終わると、もう何もなければ帰るといって附身から覚める。

七星山で韓国人が投資して宗教施設を作り観光振興に役立てようとしたが、地質調査の結果、不向きであることがわかり撤退した。三大爺のところではよ者がうまくやれるものかと述べる。

15時半過ぎまで。区に戻りバスで瀋陽北駅、そこからタクシーでホテルに17時20分着。情報の整理をし、19時モールでご飯。中間層のファミリーを対象とするレストラン街なのでこちらとしても使いやすい。

8月29日（木）9時半にタクシーで胡台鎮へ。小雨が降ってくる。10時過ぎ着。傘を買う。三輪車でいく。30円で15分程度。F鎮S村

【13】J、女性、57歳、山東省出身

大仙といわれるが、自分には子供のころからそういうものが付いている。13歳からできるようになった。その前にも、いろいろ言ったことが皆当たった。ただ、父は地元の幹部であり、それをやることを許さなかった。7年間病気があったが、30歳の時、ここの人と結婚しこちらへ来た。36、7歳の時にここでやるようになった。20数年やっている。自分のところは上房仙で、二仙姑である。

胡・黄・白（ハリネズミ）・柳（ヘビ）・灰（ネズミ）がこのあたりでは一般である。ネズミと猫の関係は、猫が居眠りをしている間に、ネズミが神の前に来るのが一番になり、それ以来、猫はネズミを仇としている（十二支の語の成立が聞かれた）。跳大神についてはわからない。

彼女はあまり当たらないと運転手は言う。村に2軒ありもう1軒の黄の方がよく当たるが、今日は家にいないという。

儀礼をやってもらう。炕の上で胡坐を組む。クライアントの私も靴を脱いで上がる。神がかると二仙姑はたばこを吸うからたばこを吸う。普段は吸わない。脈をとり、部屋に死んだ者がいて、その魂がまだ残っており取りついた。だから祓えばよい。線香とたばこの煙で祓う。符をくれる。これは二仙姑が正月に

降りてきて書いたものである。どこへ行っても大丈夫、財運も守ってくれる。附身が解けると、後ろにぼったりと倒れ込み覚める。助手の若い男がこれを支える。

鎮へ戻りバスで次の市へ、N市。三輪車で行く。

【14】男性、44歳

仙家といわれている。始めて12年になる。それ以前は病気で、足は腫れてしまい、口をきくことができなくなった。瀋陽の病院で診てもらったら、足が壊死していると言われ、そのショックで病院の窓から飛び降りようと思ったが、親族に止められ、連れて帰ってもらった。病院に行く金もないし、1日の薬代10元にも日当では不足するような日々だった。そんな時に、こういう道を勧められ、仙家に行くようになり、治るとともにやるようになった。今は家にいてやっているが、外に働きに行かないことを悔しく思っている。けれどこれをやらないと病気は再発するからやむを得ない。附身神は上房神で、仙は桃花仙仔である。書いているのは「宇宙語」である。

儀礼をやってもらう。煙草に火をつけて灰皿においておく。線香を立て、白酒を一口飲んで、机に向かって座り、年齢、名前を聞き、紙に宇宙語で書きつける。それから脈をとり、また紙に書きつける。死者霊が付いている。治す方法として「送送」をすればよい。桃の木を1本、両端の一方に赤い糸か布、もう一方に青いものを巻き付け、3日間持ち歩く。3日が過ぎたら捨てる。

祭壇の構成は、毛沢東・太上老君・聖天大聖・観音・済公、赤い布を被せてあるのは先祖の霊を祀っているところである。

鎮へ戻り蘭州ラーメンで昼ごはん。張家屯鎮へ行き、そこから三輪車で3件目、B村。運転手は家がわからず、あちこちで尋ねていく。

【15】TR、女性、60代

自分は仙ではないが、「外症」があれば見てあげることができる。小学校ではほとんど勉強しなかった。7年間病気で「久病成医」長患いは医者になるということで、自分はそういうものだ。看ることができるようになった（自分は迷信ではないと言いたい）。

今年はクライアントである私の「本命年」だから、また7月は「鬼月」だから、あちこちを移動しているとかいうことになる。陰気に当たりやすい。符を燃やせばよい。ここで陰気を祓ってあげる。

クライアントが来る。15歳の男の子で、学校へ行ったら1日で行けないようになってしまった。この半年間休んだ。両親と紹介者が同席。母親の家に仙(家仙)が祀ってあるから、こういうことになるのだと言いつつ、今のうちに勉強しないと、あなたはできるのだから、こんなに格好の良い男の子なのにと慰めつつ、ただ他の子をあなたは見下しているだろと諭して、誰も自分のことを構ってくれないのは嫌だよねという。男の子はうんと返事をする。ともかく学校へ行きなさい。将来解放軍に入れたらすごいよねといい、私が親しく思っているのは、先生・軍人・公安・医者であるけれど、神はいないと思うと語る。

15時過ぎで、ここで今回の調査は終了する。鎮へ戻り、そこから乗り合いの白タクで瀋陽西駅へ。タクシーに乗り17時10分着。情報の整理をして仕事を終える。19時タクシーで全聚徳へ行くが既に廃店、それではと原味齋で烤鴨を食べる。

8月30日(金) 9時20分チェックアウト。タクシーで空港へ40分ほど。上海行き11時25分定刻で出る。珍しい。13時35分着、空港でお茶。16時イミグレーションを経て長い待ち時間。空港wi-fiのパスワードを隣に座っていた女子学生に教えてもらうなどで暇をつぶし18時25分の関空行に乗る。MKの乗り合いタクシーで0時過ぎに自宅に到着。

注

- 1) 「和死者交談(死者と語る文化)」第三届中国(吉林)国際薩滿論壇、吉林省薩滿文化協会主催、招待講演、2012年9月2日
- 2) 本学内部的競争資金、国際言語平和研究所学内研究員による。
- 3) 「中国漢族シャーマンの職能者に関する概括」日本文化人類学会第47回研究大会、2013年6月8日、慶應義塾大学三田キャンパス
- 4) Vincent Goossaert and David A. Palmer, pp. 20-21
- 5) たとえば、町好雄1993
- 6) 上記の町が主催する気功文化センターなど多数ある。

<http://www.qigong-culture.jp/goaisatumachi.html> : 2013.12.2

- 7) ビジュアル・フォークロアが作成した『神と語る人たち—今に生きるアジアの神秘、シャーマンの世界』1987.6.5放映、の中でシャーマンの語源とされる「シャーム」というツングースの言葉が、飛び跳ねるという意味であるというナレーションから着想を得た。
- 8) 楊紅2012、273頁
- 9) 同上、274頁
- 10) 台湾の童乩と掉頭、あるいは澎湖島や重慶三峡地区での、シャーマンと楽隊で構成される集団的なセアンスの存在を、拙著2013では書き記さなかった。今後のどこかでそれをその意味を問いながら、改めて記さなければならぬだろう。
- 11) 岡田英弘1992
- 12) 劉正愛2006
- 13) 中村治兵衛1992
- 14) 癡病は心身症的なものなかつた統合失調症といった精神疾患がよくわからないが、シャーマンになるプロセスのなかでよく聞かれる。ただそれがそのまま神からの召命の巫病とは認識されていないようである。

参考文献

- 岡田英弘『世界史の誕生』ちくまライブラリー73 1992
- 中村治兵衛『中国シャーマニズムの研究』刀水書房 1992
- 町好雄『「気」を科学する』東京電機大学出版局、1993
- 楊紅『現代満州族シャーマニズムの研究』アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書2 アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究会 2012
- 劉正愛『民族生成の歴史人類学 満州・旗人・満族』風響社 2006
- 拙著「中国調査ノート2：中国中原の宗教的職能者」『環日本研究』資料編7 1-136頁 2002
- 「中国調査ノート3：中国各地の宗教的民間職能者」『環日本研究』資料編9 1-114頁 2004
- 「中国調査ノート6：中国漢人シャーマンのまとめとして」『無差』20号 67-103頁 2013
- Vincent Goossaert and David A. Palmer, *Religious Question in Modern China*. Chicago & London: The University of Chicago Press. 2011